

白選五十首



大塚陽子

花のごとく黙してありぬ花のごとくかをりてありぬ命の奥に

あたたかくもの煮て母が待てるなど思ふことなく抱かれてありき

ふりむきて思へば少女の日以後のどの日にも鳳仙花花をもちゐる

震へつつ許し合ひたるかの記憶美しくして悔いあらしむな

美しき潮の荒れ方たとへばふたり入水するならば今をえらべと

雄の鴨撃たれつづいて雌も撃ちてしまひしか月の沼波たたず

きさらぎの下界の雪はしろがねの月に照り死が怖くなかりき

十字架に磔さるるにふさはしきもみ上げ双の手にはさみつつ

最北端の標立つところ失ひしわがふるさとを見むと爪だつ

みづからを律するところ弱くしてわれは何にでも刺繍したがる

夫も子も帰るべき家もないやうなそんな心に見る遠花火

「遠花火」

樺太からふとに生まれその地に育った私は、敗戦に

より昭和二十三年に北海道へ引き揚げて来た。十八歳の夏であった。戦争中の女学校では、夏は馬鈴薯ばれいしょやビートの援農作業、冬は軍用飛行場の除雪や、木製飛行機の糊のりを作る工場への動員などで、ほとんど学問らしい勉強はしなかったのに、引き揚げて二ヶ月後には教員不足の町の小学校助教論たつとんになっていた。何を教えたのか、子供たちと一緒に遊んだ記憶しかないような先生であったのに、一年後には肺結核になり、長い療養生活に入った。まだ終戦の混乱が残っていた時代であったし、回りもまず食べることに必死で、私も結核にでもならなければ、短歌たんかに係かかわる余裕はなかったと思う。

人の夫を奪ひし重さはげしきにあはれ漂泊の思ひはやまず

今度生るときは燕 遂げざりし愛も遂げ得しことも所詮は

その死後もこの椅子にしてもものを編むわれか身ぶるひして立ち上がる

雲の切れ間の白き一筋きざはしの見えながらのぼりゆくものを見ず

むかしわたしは自在に翔べた父も母も捨て得た神はま近にあつた

七月生れわれはひまはり陽を追ひて陽に向きて七月のわれはひまはり

朝ごとの身をはげまして髪をとくわれは太陽のごとくあらねば

靴ぬぎし素足にはかに跳べさうなわれはもともと奔馬なりしか

五の指に五つの指輪はめし手を天に展げわが愚は極はまりぬ

いづれ一人残さるるわれ白鳥をふたり見て佇つ今がまぼろし

杖のほか荷物とてなき旅なれば帰らざると誰いぶからぬ

おもむろに充ちてくるゆゑかなしみは落日の朱のかがやきに似る

木蓮の花を見たとくり返す神のごときを背負ひて降りる

眺めよき場所に席とり待つと言ひき遊びのごとく死をば語りき

天にのぼりし魂は掌にのる大ききときめては喚びて握りしめるき

残されしあとをのどかにうたふなど出来ぬ不思議をわれはしてゐる

逢ひたけれ われにひとりの人ありて咲きいづる夕すげの花の夕べは

鈴つけて綱など垂れて来ぬものか日にいく度も仰ぐ空より

神はわが裡にあるとて怖れ気もなかりしがその神も老いたり

生と死と同じ重さか過去未来おなじ長さか藤垂れて咲く

〔醉芙蓉〕

昭和二十六年、回復期に入った私は教員保養所の中にあつたサークルの歌会というものに誘われた。生まれて初めて作つた短歌を今も覚えている。へまんまるく光る真珠を百ばかりのめばやさしき心かへらむ」という幼いものであつたけれど、それを忘れずにいるのは、このときの自分の心には何の曇りもなく、素直に書いた一首という思いがあるからで、その後何十年も続けてきて、短歌に倦きそうなどときにはきつとこの一首を思い出していた。素朴や素直だけがよいとは決して思わないけれど、心がみずみずと輝いていたことだけは確かであつたから。

きっかけが療養中だつたこともあつてか、その後も身を削つてというような渾身の力をこめることが出来なかつた。九十九パーセント苦しんでもぎりぎりまでは追い詰めて、残したそのほんの少しに限りない可能性があるかのように自らを欺いてきた。これは、余裕があるというのとは全く違つて、自らの限界を知る怖さを避けつづける甘えであり、意気地のない愚かさであると承知していてなお改まらなかつた。私の作品にはそんな私の本質がそのままに出ているのだらうと思う。こうして五十年続けてきたことになる。

(おおつか・ようこ「辛夷」)

傘の雫ばさりと払ふこのやうな潔きことほかには出来ぬ

いくたりの童貞を奪ひ来し鬼女の相あるは夏柑の酸ゆき好めり
共に棲むならば地獄の五番街 われの覚悟にたぢろぎて去る

善悪に優先させる 二番手は似合はぬ男であることをまづ

身の芯にくれなるの壺 いつぼんの酔芙蓉こそふさはしからむ

そり返る花をすつくと掲げもつシクラメンこそわが冬の意志

山ざくら雨にぬれつつ震へつつ二夫にまみえし身をおびやかす

憎しみのゆきつくところ悲しみのゆきつくところつひに可笑しき

手を振るよ人よ尾灯よ遠のくよ かくて全き闇となりたり

わが死出の衣は深紅 一生を恋ひて焦れて生きましたから

たつた一つのいとしきものよ恋でなく恋でない筈なきこの思ひ

「酔芙蓉」以後

美容師の男の指がしなやかに髪を切る自分の女のやうに

千手観音千本の手に千の目のありて苦しく世を見てをらむ

目を閉ぢて聴くノクターン青春はいま過ぎてきしばかりの近さ

ライオンであつたか貴方 栈橋に立つ逆光のたてがみ炎ゆる

突堤のかもめ残らず沖へ向く沖によるこびあるごとくにも

魂の在り所を問へばうづきくる胸のあたりがその位置だらう

歌よりもわれに大事のものあるとさして寂しくなく言ひ切りぬ

おほほともうふふともなく手を当てて信用ならぬ笑ひするなり